



川崎市の福祉が里山の福祉を変える ～600kmを超えて共生と連携～

神奈川県川崎市
株式会社アイム
共同創業者 河野誠二

1 はじめに

2017年消費者庁調査によると人口3～7.5万人の自治体は全国に411あると報告されています。今回(株)アイム(以下、アイム)の挑戦の舞台となった岡山県真庭市は中国山脈に位置する人口4万人の市で、中山間地域の里山として代表的な自治体です。ここでアイムが挑戦を開始したのは2016年8月。近隣住民との関係が濃い地方中小都市では、“障がい者施設設立”に対する住民の反発はとて強いものがありました。そんな中で私たちは真庭市初の放課後等デイスクールを開所し、さらに就労支援B型NPO真庭いきいき会の理事に就任し成人福祉にも参画、やがて真庭市のみなさんから応援されるようになりました。今回は川崎市で培った福祉ノウハウが、地方中小都市の福祉を活性化させている事例をご紹介します。

2 事例や取組みの紹介

① 放課後等デイサービス「ピタゴラス」を中心に地域の共生が始まった

2016年春、岡山県真庭市の保護者(母親)からアイムへ相談がありました。「真庭市には放課後等デイが1軒もなく障がい児の居場所がない。無理を承知ですがアイムで作ってもらえないでしょうか」と。そのころはまだアイム自体設立して1年半しか経っていない時期で余裕がなく、今はお断りしようと経営メンバーで話し合っていました。しかし、母親と真庭の福祉環境について話せば話すほど、施設が人里離れた山奥にあることや、施設の多くが暗く重い雰囲気であることなどを知り、まさに私たちのミッションである“明るい福祉社会の創造”を必要としていることが分かったのです。そして母親の想いに賛同した私たちは、何度も真庭市を訪れ保護者の会や教育委員会と協議を繰り返し、2016年10月に開所することを決意し動き始めたのです。

ただし、関東の企業が突然真庭市で開所するとなると近隣住民が不安を抱くのは明らかでした。そこで私たちは地元根付いた施設を目指し、真庭市にピタゴラスを設立し従業員は全員市民を採用しました。そうすることで“ピタゴラスは市の一部”ということを示していったのです。それが功を奏し、開所直後から多くの問い合わせがあり3か月でほぼ定員が埋まってしまったのです。



② 就労支援B型「NPO 真庭いきいき会」と連携。真庭市が期待する商品開発へ。

2019年1月頃、すでにピタゴラスの評判は他の福祉事業者の間でも周知され、障がい者アトで有名な施設との絵画コラボするなど企業間の共生が進んでいました。そんなある日、NPO 真庭いきいき会（任意団体から始まり30年以上の歴史を持つ）の理事から、「アイム・ピタゴラスさんの活動に都会の風を感じています。是非、今年目標としているクッキーの開発を連携して行ってもらえないか」と相談がありました。アイムは丁度生活介護で商品を開発し利用者へ還元できないかと考えていたところだったので、里山の新鮮な素材を使える本提案がとてうれしく、即答で連携を決断しました。

その後両社で協議を繰り返しました。そしてアイムから河野が理事として参画することで組織間のコネクションを強固にしつつ、クッキーレシピ開発と販路開拓はアイムが、クッキーに使う茶葉など素材の調達および製造を真庭いきいき会が行うという協業体制を構築しました。



3 考察

① 放課後等デイサービス「ピタゴラス」を中心に地域の共生が始まった

開所後3年が経ち、ピタゴラスに畑を貸してくれる農家。採れた野菜を販売してくれる八百屋。それを調理してくれるレストランができました。そしてそれら施設で子供たちは様々な体験をさせてもらっています。川崎市で培ったノウハウがまさに里山の福祉を中心とした“共生”を生み出しています。

② 就労支援B型「NPO 真庭いきいき会」と連携。真庭市が期待する商品開発へ。

開発中のクッキーは2020年1月発売に向け順調に進んでいます。川崎市で迅速に丁寧に事業を開発してきた経験が、NPO 真庭いきいき会からの信頼に大きく貢献しました。真庭いきいき会の理事はみなさん70歳を超え、理事長は80歳を超えておられます。そこに40代の河野が理事として参画し、今までありえなかったweb会議やプロジェクトを使ったプレゼンを開始するなど、理事のみなさんにとっては人生初のできごとが多々起きているようですが、まるで少年のように喜んでくれており、これもまた“共生・連携”ならではの価値なのだろうと感じています。

4 おわりに

「川崎市の福祉は進んでいる」。アイムは真庭市において2社とコラボし真剣にそう感じています。川崎市が率先して福祉事業者の意見を聞き、チャレンジしやすい環境を作ってくれたことが、いま地方中小都市の福祉に新しい風を送りこみ始めています。アイムとしては培ったノウハウを今後も地方都市へ拡大し、よりよい福祉社会を創造すべく進めていきたいと考えています。

かながわ福祉大賞には素晴らしいノウハウや体験談が毎年集まってきます。“共生・連携”がテーマの今回を機に、川崎流の福祉ノウハウを全国に発信していく一助を担えたら、それはとても幸せなことではないかと思っています。